歯学部附属病院

総合診療科口腔ケア外来

セルフケアから周術期まで予防歯科の要となる専門分野

診療科DATA

診療科長	荒川真一（歯科医師・教授）
歯科衛生士	９人（小児歯科外来と兼任）
歯科ユニット	７台
主な処置	口腔内診査・問診、歯周組織検査、歯科保健指導、歯石除去・歯面研磨（クリーニング）、フッ化物塗布・洗口剤処方
周術期口腔機能管理	手術、放射線治療、化学療法が必要な患者に対し、手術前から手術後まで計画的に口腔内を管理することで術後の感染症や合併症のリスク軽減をはかる

左から、荒川真一診療科長（歯科医師）、難波佳子さん（主任歯科衛生士）、木村文香さん（歯科衛生士）。

東京医科歯科大学の周術期口腔ケアは、他職種の連携から始まった。今では保険点数も加算されるようになり、件数も年々増加している。

口腔ケア外来は完全予約制。数カ月先まで予約が取れないほど受診希望者は多い。

「どんなに優れた歯科治療をしても、口腔内環境が整っていなければ、その効果は半減します。周術期やがん治療中の口腔ケアも、今後さらに力を注いでいきます」（荒川真一診療科長）

歯学部附属病院の総合診療科口腔ケア外来では、９人の歯科衛生士が、歯科医師の指導の下で歯石除去や歯面研磨といった専門のケアや、セルフケアの指導を行う。来院者は歯科医師からの依頼のほか、定期的なメンテナンスのために来院する人も少なくない。

「歯周病と全身疾患の関係が知られるようになったこともあり、患者さんの意識は高まっています。しかし、自分の口の中を正しく理解し、きちんとセルフケアできている人はまだ少ない印象です」と話すのは、主任歯科衛生士の難波佳子さん。

う蝕や歯周病など、口腔疾患の患者さんだけでなく、近年は医学部・歯学部附属病院で手術などを受ける患者さんに対する術前術後の口腔ケア（周術期口腔機能管理）にも注力。病棟看護師への口腔ケア指導を行うなど、多職種との連携も強化。

こうした流れを受けて、東京医科歯科大学では課題解決型高度医療人材養成プログラム「周術期患者の感染・衛生管理におけるチーム医療指導者養成プログラム」を実施。「実際に周術期口腔ケアに携わり、病棟看護師など現場の人たちと対面でコミュニケーションをとることの大切さを感じました」と話すのは、同プログラムの履修生でもある歯科衛生士の木村文香さん。

今後の総合診療科口腔ケア外来について荒川真一診療科長は、歯科医師の立場からも期待を寄せている。

「口腔内環境を整えることが全身疾患の予防さらには治癒にも有効です。口腔ケアの大切さに気づいてもらい、患者さん自ら行動するように促すことができるのが口腔ケア外来の歯科衛生士たち。じっくり時間をかけて患者さんの対応ができるのも総合診療科口腔ケア外来の特色です」 B